

第5回 川ごみサミット in とくしま 報告書



全国川ごみネットワーク

「第5回川ごみサミット in とくしま」実行委員会

目次

1. 開催目的	1
2. 開催概要	1
3. プログラム	2
4. 報告	
【第1部】	
■挨拶	3
■開催趣旨説明	4
■「里海」創生リーダー認定証授与式	5
■事例紹介	5
■全体討議・総括	13
【第2部】	
■日本三大河川シンポジウム	15
【閉会】挨拶	18
5. 吉野川清掃・エクスカージョン	18



表紙写真 吉野川(国土交通省四国地方整備局徳島河川国道事務所 提供)

1. 開催目的

川は私たちの身近なところにあり、多くの人々に親しまれ、私たちはその恵みを享受してきました。

しかし、近年、川を通じて海へと流れ出る大量のプラスチックごみが海洋プラスチック汚染を引き起こし、世界的な問題となっています。

徳島県を流れる吉野川では、日本三大暴れ川である利根川、筑後川との交流活動、市民のアドプト活動で川の環境保全が行われています。この徳島県において、全国で先進的に行われている川ごみ対策の活動や施策を紹介し、多様な情報交換、意見交換を通じて、川ごみ問題の解決のヒントを探ります。

2. 開催概要

- 日 程：2019年11月9日(土)
- 会 場：とくぎんトモニプラザ 3F 大会議室
(徳島県徳島市)
- 参加者数：200名
- 主 催：全国川ごみネットワーク
共 催：「第5回川ごみサミットinとくしま」実行委員会
(吉野川交流推進会議、徳島県河川協会、
NPO法人環境首都とくしま創造センター、徳島県)
- 協 賛：一般社団法人プラスチック循環利用協会
- 助 成：公益財団法人河川財団 河川基金



3. プログラム

13:00	【第1部】 開会・主催者挨拶 全国川ごみネットワーク 座長 亀山 久雄
13:05	挨拶 徳島県知事 飯泉 嘉門 吉野川交流推進会議 会長 福永 義和
13:15	開催趣旨説明 全国川ごみネットワーク 理事 仲井 圭二
13:20	「里海」創生リーダー認定証授与式
13:30	事例紹介・講演 ○県内① 徳島県・鮎喰川 神山町・広野小学校 ○講演① 環境省 環境省水・大気環境局 水環境課海洋環境室 室長補佐 飯野 暁 ○県内② 徳島県・江川 NPO法人江川エコフレンド 理事長 瀬尾 規子 ○県外① 長野県・諏訪湖 下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 理事 小口 智徳 ○県外② 京都府・保津川 NPO 法人プロジェクト保津川 代表理事 原田 禎夫 ○県外③ 山形県・最上川 NPO 法人パートナーシップオフィス 理事 金子 博 ○県外④ 東海三県 22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会 近藤 朗 ○講演② 国土交通省 国土交通省水管理・国土保全局 河川環境課 企画専門官 山田 拓也
15:25	－ 休憩・転換 －
15:35	全体討議・総括 ファシリテーター：みずとみどり研究会 事務局長 佐山 公一
16:15	－ 休憩・転換 －
16:30	【第2部】 日本三大河川シンポジウム2019(利根川・筑後川・吉野川) <テーマ> 吉野川から地球規模への課題に対する挑戦 <パネルディスカッション> 各河川の取り組み報告と提言(意見) ○利根川・筑後川・吉野川 それぞれの活動を紹介 ○会場出席者との意見交換 ファシリテーター：徳島河川国道事務所 所長 宮藤 秀之 パネリスト： NPO 法人利根川流域交流会 斉藤 隆 NPO 法人筑後川流域連携倶楽部 理事長 駄田井 正 吉野川交流推進会議 副会長 中村 英雄
17:40	【閉会】挨拶 全国川ごみネットワーク 理事 柴田 洋雄

4. 報告

【第1部】 開会・主催者挨拶

全国川ごみネットワーク 座長 亀山 久雄

まず、徳島県をはじめ実行委員会の皆様方に、これまで準備を積み重ね開催にこぎつけていただきましたこと、心から感謝申し上げます。

今年の日本列島は大変な災害に見舞われました。台風15号、19号、21号が相次いで来襲、突風と豪雨で河川が氾濫しました。田畑や住居は泥水につかり、尊い命までもが多数奪われました。この原因は地球温暖化による気候変動ではないでしょうか。また、海洋プラスチックごみ問題も深刻な問題となっています。今年6月、大阪でのG20会合は海洋プラスチックごみ問題が大きなテーマとなりました。町から川へ、ごみと一緒にプラごみが海に流れ、紫外線の影響を受けてマイクロプラスチックとなり、生態系に多大な影響を与えています。

川ごみサミットはこれまで東京で2回、その後、京都、諏訪湖で行い、今回が5回目となります。子供たちに美しい川を残していくために国は何をなすべきか、行政は何ができるのか、業界は、そして私たち市民は何をなすべきかなど、本日のサミットが有意義な会議となりますよう期待しまして、私の開会の挨拶とさせていただきます。



挨拶

徳島県 知事 飯泉 嘉門

近年、川から海へ流出した「プラスチックごみ」は、地球規模の課題となっており、去る6月、日本が初めて議長国を務めた「G20大阪サミット」においては、「海洋プラスチックごみ対策」で、各国がそれぞれの取組みを相互検証するという、「初の国際枠組み」の合意が得られるとともに、「海洋プラスチックごみ」による新たな汚染を2050年までにゼロとすることを目指す、「大阪ブルー・オーシャン・ビジョン」が「大阪首脳宣言」に盛り込まれたところです。

このような中、「環境首都」を標榜する本県では、本年2月、次代を担う「小・中・高校生」を対象に、「海岸保全・海ごみ対策フォーラムinとくしま」を開催し、基調講演や海岸清掃活動を通じて、機運の醸成を図るとともに、本年5月と8月には、県内事業者の皆様と「レジ袋削減等に関する協定」を締結することで、食品スーパーの実に8割を超える店舗で、「レジ袋の無料配布」が中止されるなど、「県民総ぐるみ」で「プラスチックごみ」の削減に向けた活動を、強力に展開しているところです。

本日は、川ごみについて広く学び、多くの新機軸がここ徳島から発信されることを祈念して、開催県としての挨拶とさせていただきます。



挨拶

吉野川交流推進会議 会長 福永 義和

吉野川交流推進会議は、吉野川の魅力を高め、川を通じて交流を深めるという目的で、平成 10 年 7 月に設立しました。100 を超える企業や団体、行政機関の協力を得て今日まで活動を続けています。

私たちの活動のなかに、「アドプトプログラム・吉野川」というものがあります。これは流域における 137 の団体・企業、14,000 人の方々に参加いただき、ボランティアで一斉清掃をしているもので、全国に誇るものとして定着しています。

また、平成 24 年にはここ徳島市において、飯泉知事に仲人をしていただき、利根川と筑後川と吉野川が、いわゆる三大暴れ川「坂東太郎、筑紫二郎、四国三郎」として兄弟縁組を結び、今日まで交流が続いています。

今回は、川ごみ問題を取り上げ、川ごみを削減するという全国大会を全国川ごみネットワークの方々と共同で実施することになりました。これをきっかけに、これからの活動がますます推進し、さらに今日の会合が、全国発信ができるような会となること期待をしています。また、三大河川だけでなく全国の河川と交流を広げていくことも期待しています。



開催趣旨説明

全国川ごみネットワーク 理事 仲井 圭二

海ごみ・川ごみに関する社会的背景として、2009 年に「海岸漂着物処理推進法」が制定され、漂着ごみの円滑な回収・処理に加えて、普及啓発、発生抑制対策も重要だと考えられるようになった。また、市民団体の活動も活発になり、単に回収するだけでは根本的な解決にはならず、川への流入を減らすことが重要であるということが盛んに言われるようになった。

このような問題は、1 団体だけでは解決できないので、全国の市民団体が、互いに情報交換・協力しながら活動しようという動きが進み、2015 年に全国川ごみネットワークが設立された。そして、これまで東京、京都府亀岡市、長野県下諏訪町で、4 回の川ごみサミットが開催されてきた。

本日の川ごみサミット in とくしまでは、

- 1 情報交換を行い、川ごみ海ごみ問題について知恵を出し合う
 - 2 活動を広く一般に知っていただき、多くの方に関心を引き起こしたい
 - 3 川のプラスチックごみ削減を通じて、地球規模の課題解決に繋げていきたい
- これらを趣旨として開催する。



「里海」創生リーダー認定証授与式

水環境や里海に関する知識を有し、地域での里海づくりの啓発、活動を主体となって牽引する「とくしま SATOUMI リーダー」、次世代の里海づくりを担う小学生及び中学生で構成された「とくしま SATOUMI ジュニアリーダー」に飯泉知事より認定証が手渡された。



事例紹介(県内①)徳島県・鮎喰川

「大好き鮎喰川 ～山・川・海とのつながりを学習して～」

神山町・広野小学校 児童のみなさん



私たちの学校では、夏休みの全校キャンプの時に川で泳いで遊んでいる。プールで泳ぐのも楽しいが、川遊びも楽しい。小学校のプールの水も鮎喰川からとっている。

広野小学校では、アドプト活動として、今年も5、6年生が鮎喰川の清掃活動を行った。実際に清掃活動をしてみると、たくさんゴミがあつて驚いた。空き缶やペットボトル、レジ袋だけでなく、大きな発泡スチロール、電気製品や機械の部品などがあつた。どうして川にこんなにあるのか疑問に思い、役

場の人に聞いたところ、「タイヤや電気製品などの不法投棄も多く、町外から捨てに来る人もいる。大きなゴミの廃棄にはお金がかかるので、投棄されやすい。」ということだった。

次に、私たちはプラスチックゴミについても調べた。死んだウミガメやクジラの中からビニール袋がでたとニュースで聞いたが、このビニール袋は川から海へ流れてきているということだった。こんな悲しいことが起きないようにするために、私たちが努力することが必要だと思った。そのためには、まずはポイ捨てをしないこと。そして、プラスチック製品を減らすこと。3Rの取り組みが大事だと思った。

今回の活動を通して、私たちが積極的に地域のごみ拾いなどのボランティアに参加し、他の人への声かけをすることが必要だと思った。これからは、落ちているゴミを拾ったり、自分のごみは持って帰ったりしようと思う。大切な鮎喰川は、将来、もっと美しくなって、私が大人になっても自慢できる川であってほしいと思った。

講演①

「環境省における海洋プラスチックごみ問題への取り組み」

環境省 水・大気環境局水環境課 海洋環境室 課長補佐 飯野 暁

環境省がキャンペーンを実施しているプラスチックスマートのロゴは、上半分が人の活動を、下半分は海を表しており、使ったプラスチックごみは海に流さずに回していこう、迷惑をかけないようにしよう、ということを表している。

海洋プラスチックごみ問題において、川と海が繋がっていることを強調されると、川がいけないということとなるかもしれないが、決して川が悪いわけではない。川は水が流れているだけである。

今朝、眉山にロープウェイで登って吉野川を見てきた。とても幅が広く大きい川だと実感した。この川の上流からごみが放出されたり、物の管理が悪かったりすると、当然それは川が汚染され、海へ行く。しっかり管理することが必要だと改めて思った。

先日開催された G20 の国際会議で、大阪首脳宣言、大阪ブルーオーシャンビジョンを共有し、2050 年までに海洋プラスチックごみによる追加的な汚染をゼロにまで削減することが発表された。この追加的ゼロというのは、既に出てしまったものの回収は難しいので、新しい汚染をゼロにするということ。G20 大阪サミットの少し前に軽井沢で環境大臣会合があった。日本からは前大臣である原田大臣が議長として参加し、どうやってゼロにするかという枠組みを決定した。こちらも大事である。G20 各国が参加し、自主的な対策をし、報告をして見直していくといったもので、パリ協定と似た枠組みとなっている。

日本では 900 万トンのプラスチックを消費している。そのうちの 0.数パーセントで 2~6 万トンになる。おおざっぱなイメージとして、1000 人にひとりがポイ捨てをすると、この数字になるというイメージ。このままいくと、2050 年に魚より海ごみの量が多くなると言われている。

環境省の取組を少し紹介すると、海岸漂着物処理推進事業という国庫補助金がある。ごみは川や海など、いろんなところから流れてくるので、海岸のある地域だけに負担させないという考え方のもの。この補助金は年間約 30~40 億、一般会計によるもの。もし、ごみをしっかり発生抑制すれば、この 40 億円は他のことに使える。これだけ巨額の回収処理費用がかかっているというのは、それだけ発生抑制が重要ともいえる。



発生抑制が重要ともいえる。

プラスチックスマートに話を戻すと、まず必要のないプラスチックは使わない、使ったら必ず処分する。処分しきれない場合に、流れていく分についてはしっかりと集める、こういったことを皆さんと一緒に進めていきたいと考えている。

この後も色々な発表があるので、勉強したいと思っている。また、風通しの良い関係をつくっていきたくて考えているので、よろしくお願ひしたい。

事例紹介(県内②)徳島県・江川

「アドプト・プログラムの取り組み」

NPO 法人江川エコフレンド 理事長 瀬尾 規子



私たちが清掃活動を行っている江川は、吉野川の支流であり、吉野川から約 8.8km 離れたところに源流がある。このうち上流の1km ほどのところでアドプト活動を行っている。

江川エコフレンドは、江川と吉野川及びその周辺の環境美化・保全活動を実施することにより、名水百選の江川の水源を守り、昔ながらの清流を取り戻すことを目的として、地域住民と中学生たちが一緒になって環境の保全を図る

活動、まちづくりの推進を図る活動などを行っている。

清掃は、午前6時半から7時半と時間を決め、元旦を除く毎月1日に活動を実施している。毎回の活動の参加者は 50 人から 100 人ほど。2000 年から清掃活動を始めて、延べ 17,500 人超が参加している。また、市と連携しており、集められたごみは、市が回収している。

アドプトプログラムとは、地元企業や住民が地元の道路や川の土手のような公共物を自分たちの養子(Adopt)とみなし、定期的に清掃活動するアメリカ生まれのボランティア制度で、日本では、平成 10 年に徳島県から始まった。

アドプトプログラムの効果としては、

- ①河川の環境が美しく保たれるほか、流域の河川環境の保護意識が高まる。
- ②活動状況を周知することにより、ごみ、空き缶等の投げ捨てを減らし、散乱ごみを抑制する効果が期待できる。
- ③美しい川のイメージを高め、川と生活との共生が図られる。

といった利点・効果が挙げられる。

汚くて人が寄りつかなかった場所でも、清掃してきれいになると何故か人が集まってくる。

私たちは毎回清掃のたびに現場の写真を撮って残している。次の世代、次の次の世代にこういった活動を繋げていきたい。清掃活動のあとには、会員、市民、中学生をつなぐイベントとして、朝食会を実施している。夏は流しそうめんをしたり、冬は芋煮をしたり。勿論、好評である。

来年は20周年となるので、江川の川の中(川底)のごみの清掃活動を、地域住民と一緒に実施しようと考えている。



事例紹介(県外①)長野県・諏訪湖

「源流域から始める川ごみ・海ごみ対策」

下諏訪町諏訪湖浄化推進連絡協議会 理事 小口 智徳

諏訪湖は、長野県のほぼ中央にあり、天竜川の源流である。長野県は海無し県であるが、諏訪湖から天竜川を辿って約 213 キロほどで海に着く。諏訪湖には 31 の河川が流入しているが、出ていくのは天竜川のみである。花火大会の玉数が日本一、諏訪大社の御神渡などでも有名な湖である。

諏訪湖は、昭和 40 年度くらいからコンクリート波返し護岸を造り、湖の色も緑になり、ごみも漂うひどい状況となっていた。これを徐々に人工渚へと変えたことや、下水道の普及や、住民や行政の取り組みもあり、ごみも減ってきた。しかし、よく見ると細かなプラスチックの破片がたくさんあった。大きなごみはなくなったが、細かい物に関心がないといった状況が続いていた。こういった問題をどう解決していこうかと考えた。



そこで、昨年度、全国川ごみネットワークと一緒に、細かく分類して行うごみ調査を実施した。子ども達の湖岸清掃は、前々からやっていたが、ただ拾うだけでは本質はわからないということで、ごみ調査を活用した環境学習をやってみた。

まずは第一段階として、座学、どういったごみがあるのかを勉強する。第二段階では、現地に行って調べながらごみ拾いを行い、ごみをどうすればいいか等、感じたことを発表し合う。第三段階として、学んだことを踏まえて、どんなことが悪いのか、どんなことができるかを考えた。

昨年は下諏訪町で「第4回川ごみサミット」が開催された。そこで、子どもたちにも大きな舞台上で発表してもらい、大きな張り合いをもちながら、何ができるのか感じてもらった。さらに子どもだけでなく、諏訪湖全体でもやってみようという気運が高まってきた。これは昨年、下諏訪町で第4回川ごみサミットを開催したことが良いきっかけになったと考えている。

今年 10 月に『諏訪湖まるまるゴミ調査』というものを始めた。調査結果をみると、プラスチックごみが多く、それも細かい破片が多かったということが諏訪湖全体の数字として出てきた。



やはり聞いたことより、実体験に基づいた知識は明確に皆さんの心に残る。そして、拾った人、調査した人は、捨てなくなる。諏訪湖は海に繋がっており、ごみは海へ流れていく。目に見えるごみだけでなく、マイクロプラスチックや小さなごみが問題になることも伝えながら、これからも一緒に頑張っってやっていきたい。

事例紹介(県外②)京都府・保津川

「かめおかプラスチックごみゼロ宣言」

～日本初のレジ袋禁止条例と保津川のごみ問題」

NPO 法人プロジェクト保津川 代表理事 原田 禎夫



世界で一番ごみを輸出している国は、実は日本。2位がアメリカ。海洋ごみの流出トップテンの国が日本のごみの多くを引き受けている。

日本から海外へ出て行く廃プラは比較的良質だと言われている。だから、プラごみを海外に押しつけているのではないと言う人もいるが、先進国から安い廃プラが大量に流入することで、途上国が適切な処理に取り組むインセンティブ

を引き下げてしまう。自分の国で処理できる量にしなければならない。

私は大阪商業大学で、環境ごみの問題を研究している。住んでいるのが京都府亀岡市。大阪湾から淀川を約 70 キロ上流に遡った支流が桂川で、亀岡では保津川と呼んでいる。下流は嵐山で、トロッコ列車や川下りなど、年間 150 万人が訪れる。

しかし、この川にたくさんのごみが流れ着いている残念な状況が、ここ 20 年くらい続いている。保津川の川下りは 413 年続いており、無形民俗文化財にも指定されている。経済的にも大事であるこの川が、汚されている。大雨の度にたくさんのごみが流れてくるといったのは全国どこも同じような状況ではないかと思う。一番多いのはレジ袋で、多くは木々に引っかかる。これは安全な水位まで下がらないと、回収できない。だから、川に流れ込むごみを元から絶たないといけない。そこで、どんなごみが流れているのか調べてみたところ、レジ袋やペットボトルが多かった。ペットボトルの対策は、単独の市町ではできない、国レベルの取り組みが必要。しかし、レジ袋への取り組みは、自治体レベルでできるのではないかと考える。

また、大阪湾の海底にはどれくらいのごみがあるのかを、底引き網の漁師さんに協力してもらって調査を行った。結果、推計であるがビニール袋が大阪湾で 610 万枚、レジ袋が 300 万枚沈んでいるという数字が出た。漁ができるところも減ってきている。

昨年 12 月、京都府亀岡市で市長とともに「亀岡プラスチックごみゼロ宣言」を発表した。この中にはレジ袋禁止も含まれており、大きく報道された。しかし、世界的に見るとこれは珍しいことではない。レジ袋の禁止や有料化は目標ではなく、手段である。レジ袋を禁止するだけでなく、どんな袋も無償で配布することも禁止することが大事。

最後に、もう一つ、話しておきたいのがアーティストとの連携。亀岡市はパラグライダーが盛んであるが、パラグライダーは使用期限がくると、ごみになる。素材が薄くて軽くて丈夫なので、みんなでチョキチョキ切ってエコバッグを作り、東京やパリなどで販売する。こういう仕事によって、プラごみを削減するといったこともクラウドファンディングを募ってすすめている。川ごみ削減から、新たな取組みへとひろがっている。



事例紹介(県外③)山形県・最上川

「流域間をつなぐ～東京・多摩川／荒川から山形・最上川へ」

NPO 法人パートナーシップオフィス 理事 金子 博

私は東京から転居して山形県の酒田市に住んでいる。山形県の飛島には大量のごみが漂着するし、最上川の河口部の酒田市を含む庄内海岸でも、たくさんのごみが漂着している。漂着ごみで日常的にあるのは容器包装プラスチックが多い。

東京の多摩川では、多摩地域が神奈川県から東京都に移管され、100年目となる1993年に東京都が100億円以上かけて「多摩東京移管百周年記念事業」事業を実施した。21世紀の新しい多摩地域を創ろうと、行政や民間を含めて、様々な部会が設けられた。その6つの部会のうちの2つが自然環境関係で、一つが湧水崖線部会で、いまの「みずとみどり研究会」である。もう一つが多摩川部会で、多摩川を守る活動として多摩川クリーンエイドが実施された。多摩川クリーンエイドは JEAN/クリーンアップ全国事務局(現。一般社団法人)が企画運営を行い、河川一斉清掃活動が行われた。以下、私が企画運営に携わった荒川クリーンエイドや山形でのクリーンアップキャンペーンを中心に報告する。



その後、1994年、荒川放水路の通水70周年の記念事業の一環として、多摩川でのノウハウを借りて荒川でもやってみようということで、多摩川センターに委託され、荒川クリーンエイドを実施した。特色としては、地域でリーダーを育成しようとキャプテン研修会を何回か開催した。もう一つは、調査型のクリーンアップ活動を行った。日本全国の調査結果をとりまとめた上で世界に発信するもの。アメリカの環境NGOがこの事業を推進した。様々な国で活用される国際的なデータとなった。その後の経過として、1997年任意団体の荒川クリーンエイド・フォーラムを結成。1999年にNPO法人化された。

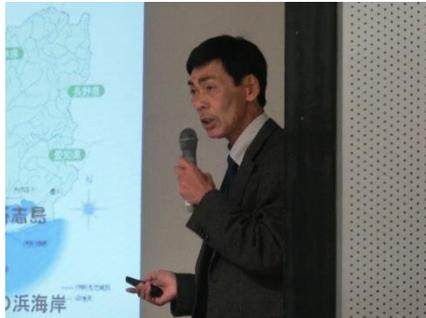


荒川での仕組みを2000年に山形県に転用した。NPO法人パートナーシップオフィスが企画協力した山形県の「美しいやまがた最上川創成構想」を基に、翌年に任意団体「美しい山形・最上川フォーラム」が設立した。多摩川と同様に部会を設置し、一斉清掃を行う「美しい山形クリーンアップキャンペーン」を実施した。より広い視野をもたないと、連携は進まない。活動の継続が大事だが、多摩川クリーンエイドは単年度で終わってしまった。荒川クリーンエイドや、山形のクリーンアップキャンペーンは、国あるいは県が継続して予算措置、事業を委託するという形で支援しているので、今も継続して発展的な活動ができています。流域一体で継続して活動するにはツールが必要で、調査型クリーンアップ、川ごみマップや身近な水環境の全国一斉調査などを活用している。アドプト制度、河川協力団体という新しい登録制度もできたので、こういったものも活用できたら良いと思う。今日は三大河川との連携イベントなので、より広く連携できればいいなと期待している。

山形県の飛島は、周囲10キロメートルの小さな島だが、特に西側の海岸は約1.5メートルに積み重なったごみで覆われていた。それを20年かけて毎年一斉清掃するなど継続して活動をしてきた結果、20年前は見えなかった砂浜が今は見えるようになってきた。継続は大事である。

「離島から河川流域を巻き込む取組みへ」

22 世紀奈佐の浜プロジェクト委員会 近藤 朗



本プロジェクトの舞台は伊勢湾及び伊勢湾に注ぐ川の流域であり、愛知・岐阜・三重にまたがる。メンバーは、愛知、岐阜、三重の3県で構成している。

このプロジェクトは、2011年12月、三重県で行われた海づくり会議の忘年会で、三重県の方から直訴があったことから始まった。「鳥羽の答志島が流れ着いたごみで大変なことになっている」とのこと。ご存じのとおり伊勢湾は伊勢

エビをはじめとした豊かな漁場である。私は急いで漁師さんに話を伺いに行った。ちなみに、環境省の調査結果によると、年間1万トンのごみが伊勢湾に流れ込んでおり、その半分が三重県の鳥羽市に流れ、大半が答志島に流れ着くとのことだった。

そんな折、3県1市(名古屋市)の各首長が集まる定期的な会で、三重県の知事から「なんとかしてくれ」と直訴があり、2012年4月にプロジェクト委員会が発足。6月に海岸清掃を行ったところ、300人が参加した。9月に本番の清掃をしたときには、500人になっていた。これが今も形を変えながら続いている。この課題の全体を見ようということで、清掃だけでなく、間伐に行ったり、愛知県の渥美半島の海岸清掃に行ったりした。今年で8年目だが、2019年現在までに計16回のごみ拾いを開催し、のべ約4,000人が参加している。

ごみで有名になるのも嬉しくはないが、このことによって、関西など全国の市民や学生達が答志島にたくさんやってくるようになった。2016年には海ごみサミットを開催した。このときは世界からも多数人がきて、刺激になった。また、今年も、台風19号の直後で、実施が危ぶまれたが、10月13日に恒例の答志島の清掃活動を実施した。

奈佐の浜プロジェクトのポリシーは、「ごみを拾うことを目的にするのはやめよう。なぜなら拾ってもまた流れてくるので無くならず、むなしいから。もっと根本的なことを考えよう」ということを目的にしている。活動場所は、伊勢湾流域全体とする。活動は年2回とし、春は答志島以外の伊勢湾流域圏域、秋は答志島に行き、流域は繋がっているということを感じてもらう。



最近の1番の目的は、人材育成。若い人が現実を見ることで自ら考えるようになってきた。若い人たちが来るようになり、彼らは最近自分たちで考え、行動するようになってきている。また、ごみを通して情報の共有もしている。

愛知・岐阜・三重は近いが、これまで一緒に何かをやるというのはなかなか無かった。互いに何の縁もゆかりもなかった学生達が、様々な活動を自分たちでやっている。これはすごいこと。ごみ拾いはあまりおもしろくないが、学生達など多くの人々が繋がっていくのを見るのは楽しい。

講演②

「河川ごみに対する取組みについて」

国土交通省 河川環境課 企画専門官 山田 拓也

かつて川と人との関係は今よりも親密であった。しかし、近年になるにつれ、経済活動が活発になり、排水や、ポイ捨てが原因で、水環境が悪化し、川と人との関わりが疎遠になってきた。

平成9年の河川法の改正で、治水・利水という目的に加え、新たに河川環境についても盛り込まれた。これにより河川の水環境に配慮した整備が進められるように法的整備がされた。

国土交通省の水辺環境を向上させる3つの方策を紹介させていただく。1つ目は、河川が本来有している生物・自然環境の保全。2つ目は、地域の取組みと一体となった水辺のまちづくり。3つ目は、河川ごみの回収、水環境整備。こういった観点で我々は様々な施策を進めている。

このなかで河川ごみへの取組みについて、話をさせていただく。

特に洪水の後などは、水辺のたくさんの河川ごみにより様々な弊害が生じている。例えば、河川の流れの阻害や、河川環境・景観の悪化、河川施設管理の障害となるなど、河川ごみの問題は、河川の水環境と管理の両面から考える必要がある。ごみは側溝から水路、川へと流れ込み、川辺に漂着したり、最終的には海に流れ着く。

国土交通省では、河川施設の管理に支障が出る物の回収、カメラを設置しての不法投棄防止などに取り組んでいる。また、全ての一級河川に、関係機関や市町村で構成する「水質汚濁防止連絡協議会」を設け、不法投棄に関する情報共有やパトロールを行っている。小中高の学校や地域の集会などに赴き、国土交通省における河川ごみ対策の取組みについて出前講座を行ったり、地域の皆様に御協力をいただき、河川の調査や清掃を行っている。

富山県の黒部川では、地元の小学校の皆さんに不法投棄防止ポスターを作成し、河川敷に設置して、「子ども達みているぞ！」と不法投棄防止を訴える取組みを実施した。吉野川では、吉野川一斉清掃やアドプト・プログラムという先進的な取組みが行われている。このように今後とも地域の方々と連携・協力をさせていただきながらごみに関する取組みを進めていく。

一級河川では、毎年1000回程度、年間約50～55万人の人が清掃活動を実施している。今後も地域住民と連携を取りながら、河川清掃などのごみ対策をしていきたい。

最後に、河川に漂着するごみにとって、流域の市街地や住宅地から流入するごみが非常に重要な問題だと考えている。流域と連携した河川ごみの削減に関する地域の英知を収集し、その知見をとりまとめ、他の地域でも同様の取組みを進められるようしていきたい。



全体討議・総括

(ファシリテーター みずとみどり研究会 事務局長 佐山 公一)

○佐山 これまでの発表から出たキーワードを受け、ご意見ご提案をお願いします。

○福永(吉野川交流推進会議)吉野川河口から上流の池田ダムまでの区間で 137 の団体・企業がアドプト活動を実施している。受け持ち区間ごとに団体名を記した看板があることにより、責任感と意識を持ってやれる。金融機関では、毎年新入行員が参加し清掃活動をしているところもある。自分のごみ拾いを行うと、ごみを捨てなくなる。



○菅谷(新河岸川水系環境連絡会)先ほど知事さんや広野小学校の子どもたちが言っていたのが、自らが行動する、広げていきたいということ。それから、パートナーシップやグラウンドワーク、いろんな方々が交流できる、広がり。こうったことがこれから重要になっていくと思われる。

○原田(NPO 法人プロジェクト保津川)今日ここにいるのは私を含めて一定の年齢以上の男性が多い。広げるという意味では、中・高校生や若い人たち、女性など、ここにいない皆さんに広げていくのが大事ではないか。

○加藤(日本プラスチック工業連盟)今年の国の予算はリサイクルに割り振られているので国もその方向に向いている。国の資源循環戦略と同時並行して、業界としても資源循環戦略をつくっており、これから実行に移していく体制をつくったところである。



日本は特殊事情があり、コストが高くなり、リサイクル品はバージン品に比べて安く設定しなければならないので、日本では市場がない。内閣府が行った環境問題に対する意識調査では、代替製品の購入条件というものがあり、条件無しに代替製品を買うという人は、13.7%しかいない。それ

以外の人は、品質が一緒だとか値段が安いなどの条件がつく。日本の消費者は、環境に優しいということコストに加えていただけない。環境への影響を評価して商品を買っていただくと事業として成り立つので、今後も、プラスチックの良いところや環境に良いところを皆さんに評価していただけるよう、広報啓発に力を入れていきたい。

○駄田井(筑後川流域連携倶楽部)我々のところは、竹があり山が荒れている。竹をプラスチックの原料にできれば良いと思っている。竹で出来たバイオマスプラスチックは、場合によると、分解されて動物のえさになる。竹が不足していった場合、休耕田に竹を植えて資源に使えば良いと考えている。

○原田(NPO 法人プロジェクト保津川)亀岡市でも、竹のパウダーを使って紙の食器を作っている企業があったが、ニーズがなく撤退した。良い取組みをしている企業を選別して応援していくことが重要。また、否定するわけではないが、ごみ発電はリサイクルではない。勿論やらないよりはましである。



○笠井(明和クリーン)私が最終処分場の管理をさせていた
だいているが、中国の輸入規制の影響から軟質系プラスチック
がかなり埋立て処分に回ってきている。硬質系については、
ほぼ 100%リサイクルができていますが、軟質系のプラスチックは
少量しかリサイクルされていない。分別の徹底ができていなか
ったり、汚れたままだったり、リサイクルの規格に合わないも
のが増えている。分別の徹底をすることで廃棄物の資源化が
100%に近づき、川のごみも減っていくので、意識改革をして
もらって、リサイクルを推進できるようにしてもらいたい。



○石合(NPO 法人海さくら)私たちは、江の島で 15 年間、「目指せ日本一楽しいごみ拾い」をモットー
に、ビーチクリーンをしている。環境に興味がない人にどうや
ってごみ拾いに参加してもらおうか、興味をもっていただくか
ということで、例えば、プロサッカーチームのサポーターの皆さん
と一緒にスタジアム前の清掃活動をしたり、おすもうさんを
ビーチに呼んで清掃活動したあとに相撲をとっていただい
たりしている。環境イベントポータルサイトがあり、イベントを
実施している。また、スターターキットとしてトングのプレゼント
もあるので、この無料ポータルサイトを是非活用してもらい



たい。

○飯野(環境省)今日の話聞いていて、通常のごみの処分を適正に処理することが重要であると
痛感している。みなさんの話を聞いていて通じるのは、発生抑制の視点。ごみを出す国民一人ひと
りの意識改革が必要。第一歩はレジ袋の有料化だと思う。まずはこれをしっかりやっていきたい。

そして、皆さんが個別に取り組んでいることをどのように行政がつないでいくか、手法や知見の蓄積
をしながら、役所で何ができるか考えていきたい。また、皆さんの活動もプラスチックスマートフォー
ラムにばっちり合致しているので、是非登録をお願いしたい。

○山田(国土交通省)気づいて、繋がって、広がっていくことがキーワードであり、大切だと思った。地
元に色々な国土交通省の事務所があり、川のことを考えて仕事をしている職員もいるので、地元
の方々と協力・連携しながらやっていきたい。

○佐山 時間なので、まとめさせていただくと、川は地図で見ると線だが、ごみの発生源であるまちを
含めて流域という面で考えていく。ごみ問題は流域全体を繋
げて考えていく。もう一つは、行政や市民、企業など、各所と
の連携していく。それから、色々なものを活用していく。竹を
活用したり、リサイクルしやすいように分別していくのが大事
だという話もあった。国交省の山田さんの言っていたキー
ワードと同意見。気づき、広がり、繋がりが、これが今回の川ごみ
サミットで話された一番のキーワードだと考える。



【第2部】

日本三大河川シンポジウム

(ファシリテーター 国土交通省 徳島河川国道事務所 所長 宮藤 秀之)

国土交通省 徳島河川国道事務所 所長 宮藤 秀之

テーマが「吉野川から地球規模への課題に対する挑戦」と大きなテーマであるが、まずは「利根川・筑後川・吉野川」の各河川における川ごみの状況と取り組みについて紹介していただきたい。



NPO 法人利根川流域交流会 斉藤 隆

利根川下流域のごみの状況をみると、不法投棄のごみは減ってきている。しかし、それでもたくさんごみはあり、そのほとんどが海に流れている。

環境先進国のドイツを訪れた際に水際を歩いてみたが、プラスチックごみはなかった。

諸外国の制度をみて、改めて、2つ提案をさせていただく。一つは、デポジット制度の導入。ドイツでは、ビン・缶・ペットボトル、すべてデポジット制度をとっており、回収してもらう際に、バーコードを読み込んでお金が戻ってくる。もう一つは、環境課税の導入。デンマークでは年間で約20億円の税収を得ている。やっている諸外国もあるので、日本でも不可能ではないと思う。



次に、小貝川の取り組みを紹介する。30年前はゴミ捨て場のような状態であり、危ない状態だった。その川をなんとかしようと地元の方々が河川敷に花を植えた。花を植えていると、ごみは捨てられない。簡単そうに見えるが、なかなか大変なことである。毎週土日の朝 8 時半から1時間半、地域の方々が草取りを 30 年間続けている。また、不定期に散乱ごみの回収をやっている。

私の願いを3つ言わせていただく。一つ目に、河川敷の草取りをやるには機械が必要であり、置き場所や管理などに誰かの持ち出しが必要なので、せめて機械を置く、保管のための倉庫を設置してほしい。水際が見える見えないで、景色が全然違う。二つ目に、ごみ拾いの申請の手続きの簡素化をしてほしい。三つ目に、地域から継続的にこういった活動をする方々が出てくるような環境を整えてほしい。

NPO 法人筑後川流域連携倶楽部 理事長 駄田井 正

産官学民と連携した筑後川流域での活動を総称したものに「筑後川プロジェクト」と名前を付けている。

筑後川は福岡、佐賀、熊本、大分と、4県に流れている川で、流域人口は110万人。川の水は有明海に流れていく。この有明海に流れるごみ問題が大変。有明海は海苔の養殖が盛んで、ごみがつくと商品にならないので、漁業者が困る。

筑後川プロジェクトのうち、ごみ拾いの活動は筑後川クリーンアップ





支援隊というものがやっている。そして、やはり一体となれるのが筑後川フェスティバル。そして、筑後川新聞。流域の新聞を2ヶ月に1回、今までに122回発行している。また、筑後川まるごと博物館構想、筑後川まるごとリバーパーク、筑後川ブランドなど、学びと遊びと仕事を一体化しようという取り組みもある。

筑後川クリーンアップ活動については、筑後川流域連携倶楽部10周年の際に、筑後川ク

リーンアップ支援隊というのを組織した。クリーンアップを始めた際、福岡県の福祉会の方から、保護観察中の若者をごみ拾いに参加させてくれという話があり、一緒に清掃活動をしたところ、法務大臣に表彰された。

吉野川交流推進会議 副会長 中村 英雄

この中でも私が一番年をとっているのではないと思う。川の掃除歴でも一番長いのではないか。掃除も昭和56年くらいからやっているの、40年くらいになる。私の所属する新町川を守る会は、平成2年3月に設立し、来年で30年になる。最初は10人くらいだった会員が、今は300人くらいいる。毎月1日と第3土曜日に掃除をしており、一回の掃除で大体4トントラック一杯のごみが集まる。呼びかけなくても20人くらい集まる。休んだのはこれまで1回か2回くらいしかない。

川掃除は地味なので、好きになってもらうためには遊びが必要。ただ単に掃除をしるというのではだめ。常に遊びが要る。だから私たちはいっぱいイベントをとってくる。川がきれいになってくると、色んな行事もやってくる。マチ☆アソビとかLEDフェスティバルなどがその例である。

「できる人が、できる時に、できる事を！」
「一人の百歩より百人の一步を！」。最初の方は良いキャッチフレーズだと思ったけれど、これはなかなか大変なことだ。やはり楽しくないとダメ。子どもを参加させるには、子どもも楽しく出来るようにしなければならない。

新町川をきれいにするには、吉野川をきれいにしなければならないということで、私たちは吉野川にも行っている。月に20日間くらいは誰かが掃除をしている。駄田井さんところ(筑後川)でもあったように、保護観察の会もあって、保護観察の子も月に1回掃除してくれることもある。

吉野川のアドプトは137の団体が参加しているが、私の方は毎月第2日曜日、朝8時から9時ということになっている。だいたい7時くらいにはみんな集まってくる。普通は10人から20人くらい。徳島河川国道事務所の宮藤所長もこの頃やってくる。歴代の所長さんも参加してくれている。掃除の後には必ずずどんを出している。ジュースではダメ。会話ができることが大事。

ごみは拾い続けたら、必ずなくなる。吉野川は190kmくらいしかなく、ナイル川でも何でもない。新町川の掃除もはじめの頃は船4隻くらいは、すぐにいっぱいになっていた。今は軽トラ1台あれば足りる。



また、拾い続けていく姿を市民も見ている。ああいう人が拾っているんだから捨てないようにしよう、と思ってくれる。

先日、ごみの分別収集調査をやってみた。調査地点は3箇所くらいで、周辺の高等学校の生徒と一緒にした。収集・分別・分析ということで、ごみを41項目に分けた。どんなごみがあるのかよく分かった。タバコの吸い殻は道路沿いにたくさんあった。タバコの吸い殻は溝に捨てると、川に出てくる。私はごみを捨てる人に対して何も言わない。黙って拾う。その方が川はきれいになっていくと思っている。

私達は、道路沿いの花も植えている。外国人も今は8人おり、一緒に水をやったりしている。日本から帰国しても、ボランティアをしてくれたら良いなと思って参加してもらっている。

そして、レジ袋は悪くない。捨てる我々が悪い。そのところが直っていかないとだめだ。先ほど斉藤さん(利根川)が言っていたような税金のかけ方をしたら直ってくるのではないかと思う。

国土交通省 徳島河川国道事務所 所長 宮藤 秀之

利根川・筑後川・吉野川のそれぞれの状況や取組みを話してもらい、色んな意見が出たところだが、皆さんからそれぞれ感想や意見、補足などがあればお伺いしたい。

NPO 法人利根川流域交流会 斉藤 隆

楽しい活動にすることが重要だということで、私たちのところも情報誌の第1号ができたところ。

そして、次世代を育てるためにどうすればという話が先ほどあったが、これについて少し紹介する。どこの地域でも同じだと思うが、活動している方の高齢化があり、若い人が入りにくい。しかし、それを乗り越えている地域もある。

例えば小貝川では、数年前から子ども達为中心となって、馬に乗りながら河川のパトロールをしたりしている。ごみを拾いながら。自然体験をすることが大事。その他、最近はドローンというのもある。子どもが中心に管理して、大人達が支える、小貝川からそういう取組みを進めていければと思う。

NPO 法人筑後川流域連携倶楽部 理事長 駄田井 正

ごみを捨てる人は絶対になくならない。やはりごみ自体を減らすことが必要。

吉野川交流推進会議 副会長 中村 英雄

川の掃除でも課題があるほどおもしろい。課題がなければこんなごみ掃除をしても何もおもしろくない。ごみを拾うという文化が3世代続いて100年したらいけると思う。短期間でやろうというのは無理。川の掃除などは、住民がやっていけば行政、企業が応援してくれる。これからの企業は社会貢献をする時代。我々も年金をもらうようになったら国家公務員だから、社会貢献をしなければならない。

何の会でもやっていったら落ち込むときがある。そのときにどう持ち上げていくかだと思う。常に変化をしていかないといけない。そして、夢をもっていないと、川掃除にしてもイベントにしても続かない。イベントが目的であれば必ず失敗する。ごみ掃除も同じ。その先どうしていきたいかが大事。



【閉会】挨拶

全国川ごみネットワーク 理事 柴田 洋雄

本日は、小学生からシニアまでいろいろな発表がありました。子どもたちに色々な経験をしてもらい、その意見をいかに実現させ、広げることが社会経験豊富なシニアの役割です。持続可能な運動につなげるのは一過性なものではなく、若い人たちなど色々な方の関りが必要です。ごみの流入をいかに減らすかが重要といったことも話されました。



印象的だったことのひとつは楽しく活動すること。ごみを拾って、満足感があり、楽しく汗をかくと、家族やまわりの人に話されるでしょう。そして、もうひとつは、見えないものが見えてくることです。子どもたちだけでなくシニアも含め、このような活動を通じて人材教育の場となります。

本日のサミットでの話は、色々な方々に色々なかたちで影響を与えるものと思います。皆さまのご協力の賜物です。ありがとうございました。

5. 吉野川清掃・エクスカージョン

- 日 程： 11月10日(日)9:30～11:00
- 会 場： 徳島市吉野川運動広場前河川敷(吉野川橋南岸下流側)
- 参加者数： 54名
- 主 催： 全国川ごみネットワーク
- 共 催： 「第5回川ごみサミットinとくしま」実行委員会



川ごみサミットの翌日は、吉野川でクリーン活動を行いました。

数名のグループに分かれ、ごみ調査カードを利用して、一つひとつ数えながらごみ拾いをしました。プラスチックや発泡スチロールの破片類が多かったのですが、お菓子などの食品ポリ袋(145 個)、タバコの吸い殻(119 個)、ペットボトル(101 個)なども多く回収されました。埋まっていたシートを掘り起こしたり、大型タイヤや布団などの粗大ごみを回収するなど、大型のごみも見受けられました。約1時間ほどの活動で散乱ごみ 32 袋(20 リットル)と粗大ごみを回収しました。



回収後には、ふりかえりの時間を設け、参加者全員で話し合いました。

- ・レジ袋やペットボトルが散見された。日々の暮らしを通じて環境意識を高めることが重要。
- ・ごみは人の生活から発生している。家のまわりのものが流れ着いている。
- ・ごみは街なかから、人の心からやってきた。
- ・ごみを減らすには、意識を変える、拾う経験をする、分解可能な容器に変えていく、ごみは持ち帰って適正に処理する。

など、さまざまな発言がありました。

川ごみサミットと併せ、川ごみについて、体験を通じ、その対策を個々人で考え、皆で共有する貴重な機会となりました。



第5回川ごみサミット in とくしま報告書

2020年2月

全国川ごみネットワーク

〒132-0033 東京都江戸川区東小松川 3-35-13-204

TEL:080-8167-8577

<http://www.kawagomi.jp/> E-mail:kawa53@kawagomi.jp

「第5回川ごみサミット in とくしま」実行委員会（徳島県環境指導課）

〒770-8570 徳島県徳島市万代町1丁目1番地

TEL:088-621-2333

E-mail:kankyoushidouka@pref.tokushima.jp



河川
基金

公益財団法人河川財団による河川基金の助成を受けています